

# 山と博物館

第39巻 第12号 1994年12月25日

大町山岳博物館



槍ヶ岳肩よりの西鎌尾根と笠ヶ岳 写真と文 飯澤 元啓

## 年頭の槍ヶ岳にて

一九九四年一月一日は槍ヶ岳山頂目ざして登っていました。人は夢中になってある行為を行っている最中に、ふと、全く別のとりとめのない妄想が浮かんでくることもあるものです。

行く川の流れば絶えずして、しかももとの水にはあらず

よどみにうかぶ「うたかた」は……  
積りいく山の雪の形は絶えずしてしかももとの形にはあらず。自然条件にて変わるその姿はかつ消え、かつ生まれ常に新しき姿を削り出す。

世の中激変しております。二十世紀後半の「よどみ」に発生した「うたかた」もはじけとんでしまいました。

「山やさん氣質」も変化している様です。

問「あなたは何故山へ登るのですか？」

○そこに山があるからです。じゃまっけな山が！それを越えないと「そこ」へ行けないのです。私は「そこ」へ行きたいのです。

○他にやることがないのです。

○「山で飲む酒の旨さを下戸知らず。」

おいしい酒を飲むためです。

○しがない四畳半のセンベイ蒲団であっても「手足を伸ばして眠れる喜び」を実感するためです。

○ニュートンの法則をリングに替って自身自身の身をもって証明するためです。

ある山の雪壁で

ヒマラヤのヒドンクレバスで

命がけの貴重な経験にてそれを証明することができました。

今年の正月の槍ヶ岳での「おいしい酒」に酔ったあけくの気紛れなる酔談でした。

(諏訪市在住)

# 近代洋風数寄者・加賀正太郎

## 大塚 融

三つ乃川

ひと目に見つ初夏の

高殿に立てば

風ゆたかなり

竹柏園たけはらぞん佐々木信綱門下の麗人、九条武子は、昭和三年没する数年前であろう、完成まもない「大山崎山荘」の露台（バルコニー）に立ち、木津・宇治・桂が合して一つとなり、雄大に流れる淀川と背後の天王山に対峙する男山を一瀉千里して、こう詠みこんだ。このいかにも公卿育ちの気品漂う歌は、生来貴族趣味を好んだ加賀正太郎の美意識に、的確に呼応している。「大山崎山荘」は、高殿に立つことによつて、その美を完結させているからだ。

「大山崎山荘」が与える感動は、小うるさい説明で辛うじて成り立っている杜寺仏閣や庭園とは速いところにある。いわば、ひたす

ら美を求める主人公の世界に、訪れる者を自然にその高みに魅き寄せる力を持っている。その意味で、「大山崎山荘」は、美の世界性を有しているといつてよいだろう。

明治二十一年、商都・大阪の中心・船場の裕福な株式仲買商の長男に生まれた加賀正太郎は、十代の大半を鹿鳴館外交時代以来猛烈な勢いで国際化の進む東京で、多感な心を燃やし続けた。

「余は少年の時蝶を追つて山に入り、山が好きになった。当時の日本本土産蝶類百四十七種の採集が成功に近づく頃には、植物に対する愛好心が芽生えていた。（中略）蝶に引かれての山登りは、登山趣味を根づよいものにした。」（昭和二十一年刊「蘭花譜序」）

明治二十年前後に生まれた資産家の少年たちには、現在振り返ってみると、趣味のたどり方に共通な道歩んでいることに気づく。まず蝶の採集から高山植物へと趣味を広げ、



若き日の加賀正太郎（大正11年）（加賀高之氏蔵）

やがて登山へとスケールが大きくなり、社会的に成熟する世代に入ると、ゴルフに目を向けるのである。これは、加賀のように富商の生まれであれ、公卿や高級官僚の生まれであれ、あるいは上方育ちであれ、東京育ちであれ、一度はこの道筋に入り込んでいる。前世代の大川端趣味とは一転した洋風趣

味に染まっていく。しかも、単に西洋一般ではなく、当時世界の覇権を握っていたイギリスの、しかもヴィクトリア王朝の貴族趣味に似通っていることに注意を要する。

明治四十年、科学者を志しながらも家業のため心ならずも、東京高等商業（現・一橋大学）に進んだ加賀は、それまでも大・小の日本の山々を征服して

いたのであろう。直ちに発足したばかりの日本山岳会に入り、大自

然の美の世界に青春の心を躍らせるのである。その頂点は、在学中の明治四十三年、日英博覧会見学のため初めて訪れたヨーロッパ旅行であった。加賀はここで二つの美の核心を手

に入れる。一つは「スウイス主峰 ユングフラウの頂上を極めたるもの、日本人として余が最初の記録である事を知つて、寧ろ奇異の感にうたれた」（前掲書）と書くヨーロッパアルプスの大自然の美。もう一つは「英京滞在中、キューガーデン其他に於て、蘭栽培の

実況を見学して、非常に感銘を受け、蘭栽培の興味忘れ得ず、遂に余が終生のホビーの一つとなった」（前掲書）と誌す気品ある貴族の花の美であった。

いずれにしても恵まれた資産なしに手にすることのできない美意識ではあるが、加賀は自らの中にそれを存分に培養することをなした稀有な存在であった。

大山崎山荘はおそらく近代日本で最もスケールの大きい、最も繊細さにあふれた美の舞台である。ヨーロッパ旅行の熱気冷めやらぬ加賀は帰国後、学窓・三枝威之介や後に山岳画家として名を成す中村清太郎らと日本ア

ルプスを踏破しながら、日本山岳会誌「山岳」に「欧州アルプス越へ」と題したユングフラウ登山の紀行文を寄せる。この時二十三歳の若き加賀は頂上に立った一年前の興奮を「雲は更に動かず、空は以て言い表すべき色はない、豪石の景・森蔽の気、これを味わんとするものは此時此処に来てたつ外断じて策はないのである。恍として自己の存在を没却し了した」と伝える。卒業後、大阪に戻り、株式仲買人の主人におさまったとはいえ、青年加賀の美の火は消えることはなかった。

キューガーデンで目にした洋蘭の気品を忘れることのできない加賀は、自ら栽培に乗り出すことを決意する。わが国で漸くはじまつたばかりの洋蘭栽培に一度は科学者を志したことのある加賀の心は燃える。関西の日本人には先駆者はいないが、幸い大阪上本町にはイギリス人起業家、ハンス・ハンター（日本名 範多範三郎）が温室を作り洋蘭の栽培をしていた。この出会いは加賀にとつて全く幸運であった。趣味の世界では蝶採集・登山・狩猟・フライフィッシング・ゴルフ・建築・造園とイギリスの貴族趣味を身につけた



大山崎山荘



ユングフラウ登山中の加賀正太郎 (左) (加賀高之氏蔵)

「……大山崎山荘の開拓は、三十年に亘つて山を開き藪道を作り、石を動かし、苗木を植え、家を建てたのである。そしてその全部が余の考案設計になるものである。道路・建築・温室・水流・庭園・田畑・山林の植樹等々一木一石の末に至るまで、余独自の考案設計に成るものである。その善悪は知らない……」(前掲書)

わたしはこの一節を読むたびに、わが国の

ハンス・ハンターの存在は心強かつたにちがいない。この出会いによって大山崎山荘の美の舞台は準備が整ったといつてよいかも知れぬ。

「大山崎山荘」は京・大阪を分ける天王山の麓に今もお雄大な姿をとどめる。かつて戦国武士が天下分け目の戦いが続けられた地、足下に数奇の美の頂点、茶人・利久の造つた茶室「待庵」(国宝)を踏みしめ、加賀は青春の夢の実現に着手する。大正四年、二十七歳。

「……大山崎山荘の開拓は、三十年に亘つて山を開き藪道を作り、石を動かし、苗木を植え、家を建てたのである。そしてその全部が余の考案設計になるものである。道路・建築・温室・水流・庭園・田畑・山林の植樹等々一木一石の末に至るまで、余独自の考案設計に成るものである。その善悪は知らない……」(前掲書)

わたしはこの一節を読むたびに、わが国の

芸術家と称する芸術屋・建築家と称する建築屋、造園家と称する造園屋等々これら一群の存在の卑少さに比べて加賀の自信にあふれた大きさに感服する。驚くことに建築屋ではない加賀は、どこで学んだのか独力で図面を引き、どこで目を鍛えたのか独力で木や石を選び抜き、どこで覚えたのかひと筋縄ではいかない大工の棟梁や庭師を使いこなし、文字通り大自然をキャンパスに三十年に渡る絵を描きつづける。例え、加賀を上回る何倍もの資産があるとしても、例え、加賀を上回る何倍もの建築や芸術の素養を積むことができて、加賀の持つ天性の美の総合性・緻密さ、繊細を身につけることは困難であろう。

実際に用意周到であった。三万坪の敷地の高みに先ず高さ十メートルほどの塔を建て、その最上階の十畳ほどに、加賀は四季を通して、昼夜を別たず、雨の日、雪の日も昇り、敷地に差し込む陽光、月光、隣地の寺の多宝塔とのバランス、淀川を隔てる名勝男山の借景、四季を通して植栽の変化……。あらゆる要素を布陣しながら絵を描き進めていく。

大きな庭石を気に入るまで何度か何度も運び変えさせたり、自ら木材市場に足を運んで材木を運んだり、新妻とヨーロッパ旅行の折も気に入るシャネリアを見出すまで首が痛くなるほど天井ばかり見上げたり、いささかも手を抜こうともせぬその美への意志力に感嘆する。

登山家としての加賀正太郎を知らずに、初めて大山崎山荘の本館を裏手から眺めた時、鋭く尖った屋根根根や高木のびる煙出しが、まるでアルプスの連山のようにわたしの目に映った。大きな露台(バルコニー)を見る正面からの本館は、どっしりとした気品あふれる山小屋そのものである。

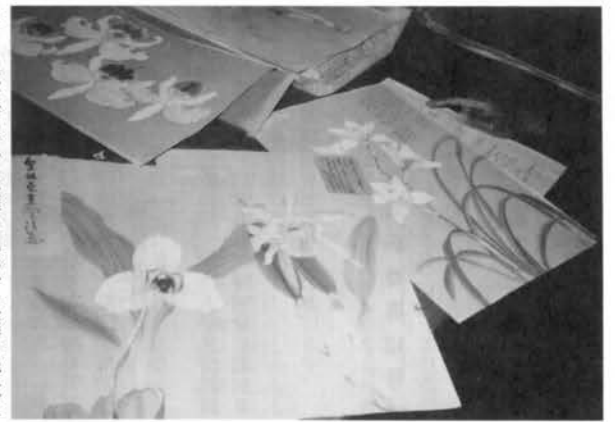
千利休の茶室「待庵」の前を走る踏切を越え、天王山の急坂をやがて右手に折れ大きく大山崎山荘への展開が始まる。優美に大きく左に円弧を描いて、道はレンガの石組の隧道を

抜けると、正面に切り通しの土壁を目にしたからこんどは右手に曲り、訪れる者をして次の展開の予測の図り難い不思議な時間のドラマに誘うのである。明らかに誰もが意識する「別世界」、加賀の持つ視線の確かさの証左である。視線のリズムは、山荘の緩やかな直線の坂道に沿って続き、やがて巨大な車庫に当って鋭く右に折れ鉄の門扉を越えて山荘の中心をなす洋館が木の間隠れに姿を現す。このリズムは、あたかも交響楽のようであり、山水画のようでもある。加賀正太郎は、アルプス登山によって獲得した大自然の美の本質をここに再現したかのようなのである。鉄の門扉から洋館に至る間の巨木が、洋館を大きく隠すことよって、洋館の神秘性を増す効果を持つ。この配置は、見事というほかにない。

加賀はこの山荘を彩るに、イギリス貴族の花、洋蘭をもつてした。ここでも周到である。当時の洋蘭栽培のメッカ、新宿御苑から園丁・後藤兼吉を招き一角に住ませ、終生の蘭花の盟友として、主従の間を乗り越えて新品種の交配に打ちこむ。百六十五坪の大温室で、一万鉢をこえる洋蘭。山荘は蘭屋敷と呼ばれるようになる。加賀は後藤兼吉を日本一の洋蘭栽培家に育てる。同時に後藤の栽培技術を秘すことなく、全国の園芸業者のために惜し気もなく伝授を許し、大山崎山荘は洋蘭栽培のメッカと化する。度量の広さ、まことにパトロンの名に値する。

重い蔭の山道をたどるように、洋館二階に向かうと、九条武子の詠むむつたりとした広さの高殿に立つことになり、ここからの眺望によって山荘の美は頂点に達する。部屋部屋から漂う蘭花の香りが、加賀の生来の貴族趣味を満足させたにちがいない。

加賀の美への執念はここで終わっていない。昭和六年、満州事変の無風流にいら立ち、日本最高の風流を世界に披露することを志す。「蘭花譜」の着手である。山荘の洋蘭のうち百四種を選び、特に八十八種は浮世絵の技術



蘭花譜

(数寄者研究家)

による木版画で、正確な色彩、正確な形状に写し取り、後世に遺すことを企画する。絵師・彫師・刷師とも加賀の目になつた第一級の職人、百二十度刷りという繊細な工程を経て「蘭花譜」が刊行された時、世界大戦の無風流は終わっていた。この年、昭和二十一年、加賀はこの「蘭花譜」を世界の植物園・大学・研究者に惜し気もなく贈る。もはや、加賀の資力は尽きようとしているというのに。

加賀は一貫して近代的な数寄風流・英国風貴族趣味を持っていた。英文学者・文豪漱石をこの山荘に招き、山荘の名前を委嘱しながら、漱石の送る十四もの命名を採らず、漱石を憤慨させる。たとえ大文豪であろうと、漢籍に典拠した名前が加賀の意に沿わなかったのである。若き加賀の自負心にわたしは賛嘆するほかにない。

加賀正太郎は昭和二十九年、六十六歳で終った。

# 博物館だより

## 絵画の寄贈

平成6年夏の企画展「日本山岳画協会展」で展示していただきました日本山岳画協会会員の牧潤一先生と江村真一先生より油絵を山岳博物館の展示充実のためにご寄贈いただきました。

絵画「暁のマッターホルン」 100号  
埼玉県上福岡市上野台3の4の135の4

牧 潤一



絵画「厳冬の穂高」 30号

東京都杉並区善福寺1の1の2

江村 真一



バックナンバーのおしらせ(1)

次の巻号のバックナンバーがあります。内容は主なものの紹介ですが、ご了承ください。

第31巻第10号 (昭和61年10月) 糸魚川静岡地質構造線の諸問題 平林照雄  
大町市中綱湖のヌマカイメン 宮田 渡  
第31巻第11号 (昭和61年11月) ニホンライチョウの生活と植物群落 平林国男

美麻村不須峯産の鯨の化石 木船 清  
第31巻第12号 (昭和61年12月) 仁科氏の城跡 篠崎健一郎

安曇野のオレンジガエル 宮田 渡  
第32巻第1号 (昭和62年1月) 大町市三日町来見原遺跡概略 島田哲男

昔の精白・製粉と食品―北アルプス地方の食生活(2)― 青木 治  
第32巻第3号 (昭和62年3月) 山岳博物館の新着寄託資料と展示替え 宮野典夫

第32巻第4号 (昭和62年4月) ニホンライチョウに発生した痘瘡 太田俊明  
第32巻第5号 (昭和62年5月) 秘境・チベット紀行―私が見た高地民族― 山崎佐喜治

飛騨の国の白いコウモリ(1) 宮尾嶽雄  
第32巻第6号 (昭和62年6月) 世界のライチョウ ハンス・アッシエンブレンナー

霊松寺のおハツキイチョウ―市指定の天然記念物に― 宮田 渡

古い写真をめぐって 峯村 隆  
第32巻第9号 (昭和62年9月) 信州の野ネズミたち 両角徹郎

大町わが画室 中川 力  
第32巻第10号 (昭和62年10月) チロルの風土と民俗・民芸品寸見 長沢 武

信濃にちなむ山の植物(1) 田畑真一  
第32巻第11号 (昭和62年11月) オオライチョウの雛を育てる 宮野典夫

信濃にちなむ山の植物(2) 田畑真一  
第32巻第12号 (昭和62年12月) 仁科三湖―その陸水と生物― 丸山 晃

第33巻第1号 (昭和63年1月) ランタン・リ峰登頂 一ノ瀬雄三  
第33巻第2号 (昭和63年2月) インスブルックアルプス動物園 見学記 宮田 渡

第33巻第3号 (昭和63年3月) 山岳博物館を考える―展示室を中心として― ツエルマツト山岳博物館 平林国男

第33巻第4号 (昭和63年4月) 森城跡と仁科氏―地名から推定する歴史の一試論― 幅 具義

スイス山岳博物館 草刈清人  
第33巻第5号 (昭和63年5月) ハクセキレイの大北地方繁殖について 長沢修介

第33巻第6号 (昭和63年6月) 幻の山岳写真―保里写真館― 穂苅真雄  
第33巻第8号 (昭和63年8月) チョモランマ／サガルマタ交差縦走 重廣恒夫

第33巻第9号 (昭和63年9月) 「聖職の碑」を読む・歩く 福与邦夫  
第33巻第10号 (昭和63年10月) 信州版画界の現況 羽田智千代

大町の版画人のことなど 石沢 清  
第33巻第11号 (昭和63年11月) 北安曇郡における長野県北部の地震(美麻地震―信毎による)の震度分布について 木船 清

第33巻第12号 (昭和63年12月) リスの進化論と私 加藤 順  
第34巻第1号 (平成元年1月) ネパールを旅して 矢口真理子

第34巻第2号 (平成元年2月) 雪溪から氷河へ―立山に氷河はあるだろうか― 飯田 肇

バックナンバーの請求方法  
右記にご希望のものがありましたら、一部一〇〇円でおわけします。巻号と部数を明記の上、現金書留か口座振替で、大町山岳博物館宛にご送金ください。(送料当方負担)

―計報― 当館顧問、信州大学名誉教授 羽田健三先生が、11月21日1時56分に逝去されました。享年73歳。  
慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

**山と博物館 第39巻 第12号**  
一九九四年十二月二十五日発行  
発行所 千穂長野県大町市 TEL027-221-1111  
印刷所 長野県大町市 山岳博物館  
大町 山岳博物館  
大余タイムス印刷部  
定価 年額一、五〇〇円(送料込)(切手不可)  
郵便振替口座番号05400713393